



NPO 法人
リタイアメント情報センター
Retirement & Information Center



Re live Journal



りらいぶ” ジャーナル No.42

2022年 新春号（1月20日発行）

< “りらいぶ” 憲章 >

- 組織、肩書き、経歴にとらわれない自由な生き方
- 知識、経験、技術を生かして社会に貢献する生き方
- 初心に帰って新しい自分を発見する生き方

私たちNPO法人リタイアメント情報センターはこのような生き方を“りらいぶ”と呼び、その生き方をサポートします

< 目次 >

1. 「クルーズトレインななつ星 in 九州」の旅（5日）（楽しい人生を求めて）
（R & I 顧問・会員 渡嶋 八洲夫）
2. 「元防衛大臣 森本敏さまを囲む会」に出席して
（木津谷 文吾）
3. 鞍が回る
（会員 鳥居 雄司）
4. 百科事典のセールスマン
（会員 赤神 潔）





1. 「クルーズトレインななつ星 in 九州」 の旅（5日） （楽しい人生を求めて）

元キャメロン会 会長
R&I 顧問・会員 渡嶋八洲夫



一度は乗ってみたいと思っておりました「クルーズトレインななつ星 in 九州」の旅にやっと参加することができた。やや高価な旅にもかかわらず予約しにくいといわれており（参考1）、この春幸いかりつけの旅行社から案内があり早速申し込んだ。旅行は2021年11月8日～12日の5日間である。

（参考1）応募倍率 — 初回8倍その後22倍のこともあった。

1. 「クルーズトレインななつ星号」について

日本での製造の段階で関係者はヨーロッパ「特別列車オリエント特急」、南アフリカの「ロボスレイル」等を参考にしながら検討、九州の良さを取り入れたホテル並みの静かさを持った最高級の客室だとのコンセンサスがきまった。試行錯誤をくりかえしつつ設計・製造と進み、外観、室内ともに高級感と重厚感あふれる豪華列車が誕生した。2013年10月から運行を始めた。

（1）「ななつ星」の由来

列車製造に先立ち「この列車」が持つべき特性を議論、九州が有する特性から7項目を選定、列車名を「ななつ星」と決めた。

- ① 雄大な大自然（阿蘇、桜島、由布岳）
- ② 豊富な温泉（温泉数、湧き出量とも日本一を誇る大分）
- ③ 品質抜群な食材（恵まれた気象風土が生む素晴らしい食材と独自の豊かな食文化）
- ④ 歴史（高千穂峡・神社）
- ⑤ 伝統産業（有田焼・、伊万里焼、大川組子の格子戸）
- ⑥ 九州人の温かみ、人情味
- ⑦ 列車（木材を主材料にした柔らかい雰囲気、心地よい、ゆったりした空間。

大川組子による格子戸並びに有田焼人間国宝14代酒井田柿右衛門製品も贅沢に使われている。

（2）列車の編成は7輛とし部屋ごととは違った設計とした。製造は3社に依頼した

機関車（川崎重工業製）

- 1号車（JR九州製）（展望窓を備えたラウンジカー）
- 2号車（JR九州製）（地元の有名シェフが腕を振るうダイニングカー）
- 3号車（JR九州製）（301号デラックス客室～303号）
- 4号車（日立製）（401号デラックス客室～403号）
- 5号車（日立製）（501号デラックス客室～503号）
- 6号車（日立製）（601号デラックス客室～603号）
- 7号車（日立製）（701号DXデラックスA客室号、702号DXデラックスB客室）





(3) 部屋の内装

各客室の内装はぬくもりある木材がふんだんに使われた。客室のデザインは全て異なり、十分な安息が得られる、高級感あふれた客室とした。客室ごとに異なった木材が使われている。

- ① 301 号室 壁（米松） 床と家具（ナラ）
天井（漆喰調） サニタリー（壁（白大理石）、床（タイル）、家具（ナラ））
- ② 401 号室 壁・床・家具（カリン）、
天井（漆喰調）、サニタリー（壁（米松）、床と家具（ナラ））
- ③ 502 号室 壁・床・天井（エンブイヤ）、
天井（漆喰調）、サニタリー（全てメープル）
- ④ 601 号室 壁、床、家具（カリン）、
天井（漆喰調）、サニタリー（壁、床、家具（サクラ）、天井（白塗装））
- ⑤ 702 号室 床、家具→壁（ローズウッド）、
天井（漆喰調）、寝室とサニタリー（全てメープル）



客室その1



客室その2



客室その3



客室の洗面所のシンク

(4) 「ななつ星列車」並びに「ななつ星バス（注2）」の外装

古代漆色に塗装されており高級感と重厚感にあふれている。

（注2）「ななつ星列車」の弟分として「ななつ星バス」を製造した。両車は常に同一行動をとる。バスは観光や移動のため列車の到着をみこして、さきまわりし待機している。



(5) 客室並びに5両に渡る長い通路には絵画、14代酒井田柿右衛門製品がさりげなくおかれている。通路は高級感と重厚感あふれた内装に仕上げられている。

各客室に設置された7角形の有田焼シンクは素地の柔らかな乳白色の磁器は世界的に評価が高い。一つ一つの細部のデザインは異なる。そのユニークな造形、自然をモチーフにした絵柄はどれも一見の価値がある。各部屋に置かれたランプシェード台は落ちついた暖かさを演出している。

(6) 食事

各地の有名店のシェフが列車に乗り込み、持参した地元の材料で料理をしたものが供される。高級な食器に盛られだされる料理はどれも見た目も美しく、もちろん美味しい。アルコール類は1部特殊なものを除きフリーであった。

(7) クルー

客ごとに専任のクルーが決まり、日々の案内、食事のサービス等を担当する。クルーは厳選の末任命式を経て任命される。客と積極的に会話をするように言われており、会話のきっかけのため写真



入り名刺を全員もっている。客にはこれを集めるよう勧められる。スタッフはJR九州の社員（運転手、車掌、スタッフから）また経験を積んだ人を社外からも採用する。客へのサービスの他、時には制服を作業着に履き替えて列車の清掃や連結作業も担う。常に笑顔を絶やさず客に接するよう教育されている。自分の仕事に誇りを持っており士気は高い。サービスの一つ列車の掃除は最重要事項として教えられている。

第1回日本サービス賞で総理大臣賞を受賞している。

(8) ドレスコード

最初の案内だとセミフォーマルとのことであったが、今回はチャーター便なので夕食時はスマートカジュアルでよいとのこと、 PoloシャツかTシャツで気楽にとかんがえていたが、Tシャツとジーンズ駄目とのことであった。



寿司料理



寿司職人

2. デザイナーの思い【「ななつ星」という奇跡】 (デザイナー水戸岡鋭治 (注3))

(注3) 本稿はデザイナー水戸岡鋭治氏『めぐり逢う旅』ななつ星 in 九州公式写真集 (JR九州発行) に寄稿されたもの。

「ななつ星 in 九州」は、2度とつくりえない奇跡の列車です。デザイナーも、設計者も工場で作業した人も、調度品をつくった職人、参加した人全

員それぞれが全力投球できた仕事。結果として（車両）という意味では極めて精巧な箱、つまり舞台をつくり上げられたと思います。その舞台の上で、今、クルーたちが情熱を持ってサービスをし、料理人たちが最高の仕事をしている。

ですから、乗客の皆さんは、かつてない体験をされている。

乗っていただいたかたには、きっと伝わると思うのです。これは尋常じゃないと。人の手、人の技、人の思い、あるいは志が、端から端まで感じられる、かつてない列車であることということが・・・これが「ななつ星 in 九州」が夢の列車といわれるゆえんでしょう。(中略) オリエント特急の車内装飾には、ヨーロッパのガラス工房のリックが大きく寄与しています。では、「ななつ星」は？考えていたときに出会ったのが、有田焼の人間国宝である14代酒井田柿右衛門さんと大川組子の職人たちです。これでデザインの構想が固まりました。九州と工芸と列車がひとつになったわけです。これは大きかったですね。

列車の見所、なんといっても窓。「ななつ星」では窓を沿線の風景を見る額縁と捉えていて、いろんな「絵画」鑑賞してもらえるように、手間をかけて窓をデザインした。客室の窓の内側は木のロールブラインド、障子、木戸、カーテンという具合に、四重構造になっています。これによって光をさまざまに調整にできるお客さま自身の感覚で光を含めて景色をたのしんでいただきたいのです。

「ななつ星」には全部で14の客室がありますが、一つとして同じ部屋はありません。床・天井・家具の素材の組み合わせカーテンの模様。サニタリーシンク、掛かっている絵に至るまでデザインをすべてかえています。さらに長い長い通路には、200枚以上の絵の展示。つまり、列車そのものが一つのミュージアムになっているのです。

いま「ななつ星」は想像以上の話題性と期待感を持って皆さんから受け止められています。それに関しては、私自身が一番驚いています。列車を見て泣いている方がいたり、地元の沿線の人たちが喜んでくれている。「ななつ星」は、あらゆるタイミングがそろった幸運の産物だからなんですね。こうゆう列車が欲しいという時代、プロジェ



クトを動かすリーダー、現場でものづくりをする職人たち、実際に運営しているスタッフ、そしてロマンあふれる冒険のようなプロジェクトに期待してくれ、乗ってくださる乗客ののかたがた、どれが欠けても実現は不可能だと思います。

3. 列車の運行ルート

博多駅（ホテル日航福岡泊）→門司港駅（門司港観光）→（くにさき七島蘭制作体験）→別府駅→宮地駅（車中泊）→阿蘇駅（草千里散策）→湯布院駅（湯布院玉の湯泊）→別府駅→門川駅（都農ワイナリー見学）→田野駅（組子製作）→南宮崎駅→鹿児島中央駅（車内泊）→川内駅→出水駅（市内観光）→博多（下車）

4. いよいよ「ななつ星」に乗車

{1日目} 11月8日（月）

今晚宿泊するホテル日航福岡にチェックインした後、前夜祭の会場である「カノピアーノ福岡」まで「ななつ星バス」が送迎してくれた。前夜祭では植竹シェフの自然派イタリアンのディナーと岩崎さんによるピアノと西川さんによるヴァイオリンのミニコンサートを楽しんだ。

{2日目} 11月9日（火）

いよいよ「ななつ星」に乗るため博多駅の専用ラウンジ「金星」までに歩いて行く。スイーツを頂きながらくつろぐ。旅行の無事を祈って乾杯後関係者に見送られながら出発、鐘が7回振られ拍手がおこる。昼食は博多の名店「やま山」寿司のネタ等1式を車内に持ち込み大将自ら握ってくれた。ネタはもちろん新鮮で種類も多く高級食器に乗せ出してくれた、もちろん美味しく頂いた。門司駅付近を歩いた、大正3年（1914）に建設された門司駅（重要文化財）、アインシュタインも宿泊した旧三井クラブ等を見学した。くにさき七島蘭の製作体験も楽しんだ。夕食は「Otto Settle Oita」による大分特有の食材を別府鉄輪の地獄蒸しを使った料理。食後のバータイムには黒崎さんによるテーブルマジックを楽しんだ。

{3日目} 11月10日（水）

深夜には宮地駅に到着後翌朝まで停車の予定であったが、雨と落ち葉のために滑って予定通り

に走れず朝方阿蘇駅についた。列車が止まったり走ったり、よく眠れなかった。希望者は草千里の観光のはずだったか霧で何も見えず、ただ車で移動中に阿蘇五岳の根子岳は見ることはできた。朝食はホームに建てられたレストラン「火星」でとった。地元レストラン「オルモコッピア」自家菜園野菜と南阿蘇からとどく露地栽培の無農薬野菜を中心とした朝食であった。



レストラン「火星」の朝食

昼食は大分の食材を使った「方寸」の創作和食が供された。湯布院駅に到着、宿泊する玉の湯で荷物を解いた。夕食前に湯布院の温泉街を散策、金鱗湖や佛山寺を訪れた、紅葉がとてもきれいだった。



湯布院散策



湯布院散策



玉の湯の部屋は「離れ」になっており、大きな居間、寝室、浴室があり、夕食・朝食は別棟の食堂に出向かなければならない。温泉は勿論流し湯で浴槽も大きくゆっくりとした。列車のゆれもなく静かで熟睡した。

〔玉の湯夕食の献立〕

季節の小鉢（鱸と白菜のサラダ、海老芋の白和え）
旬の野菜等の盛り合わせ（大根寿司、厚焼き卵子、菊花燕、舞茸白扇揚げ、卵の花、抹茶栗だるま、胡桃かりんとう）
お吸い物（土瓶蒸しまたはスッポンのお吸いもの）
田舎風煮物お好みで（山女魚の塩焼き、またはハナコウコ、揚げ豆腐）
メインディッシュ（豚しゃぶ）
ご飯、香の物デザート（卵アイスクリーム、カボスシャーベット、黒ゴマのアイスクリーム）

〔4日目〕 11月11日（木）

湯布院からはバスで別府駅に向かい、別府駅で「ななつ星」に乗り、宮崎県に向かった。昼食はななつ星オリジナルの「京屋本店」の折り詰め弁当を楽しんだ弁当。



〔京屋本店二段重弁当〕

〔上段〕

関鯛柚庵焼 子持ち鮎甘露煮 烏賊黄身焼き
 たらこ寄せ
 京屋の森から（大分鳥骨鶏、玉子焼き）
 姫島産（車海老旨煮）
 上冬菇椎茸旨煮 平目木の芽笹寿司
 穴子鳴門巻 茄子田楽 柿と鰯のなます

〔下段〕

豊後牛クラシタしゃぶしゃぶ
 自家製わらび餅 柚子と百合根のごはん

〔吸い物〕

燕と舞茸の白味噌仕立て

昼食後門川駅で降りバスで都農ワイナリーへ。太平洋と宮崎平野を一望できる海に見える丘「都農ワイナリー」工場見学と試飲従業員が作ったつまみとワインの試飲をした。その週アジアワイン祭りで金賞を受けた白ワインを3本購入宅配便で我が家に送ってもらった。見学後田沢駅で「ななつ星」の入線の模様を見学した。最後の夕食は「燗火（おきび）Kawaguchi」を楽しんだ。からすみ最中、青ネギと宮崎キャビア、幻といわれる尾崎牛のおきび焼き、デザート等で満腹。

夕食後のバータイムではピアニストの岩崎さんとヴァイオリニストのMAIKOさんによるミニコンサートで楽しんだ。今晚は鹿児島中央に停車の「ななつ星」で車中泊。

〔5日目〕 11月12日（金）

鹿児島中央駅を出発し、川内駅から八代駅までは肥後おれんじ鉄道の区間を走り運転手もこの間だけは肥後おれんじ鉄道の運転手に交代した。出水駅に到着、武家屋敷の見学に出かけた。税所邸で地元の人のお琴の演奏とお抹茶の接待をうけた。



出水武家屋敷での抹茶接待



今夜の夕食はななつ星最後、「RESTAURANT MIMAKI」による熊本の食材を使った料理を頂いた。博多到着前に1号車でサヨナラパーティが開催され今回の旅のスライドショーを見ながら楽しかった旅を振り返った。



サヨナラパーティでスライドをみる

この特別列車を誕生させるべく多くの人々が全力投球で、知恵・知識・技術・技量を投入して生まれた宝物だ。心づくしの食事、素晴らしい・温泉・観光を経験した。クルーの行き届いたサービスも受けた。車窓からの変わりゆく景色、列車に手を振ってくれた多くの地元の人々との出会い。驚き・感動・感銘・満足を覚え、貴重な体験をした。十分満足した。関係者には感謝申し上げる。

以上



2. 「元防衛大臣 森本敏さまを囲む会」 に出席して

2021・12・18

木津谷 文吾



講演される 森本 敏 氏

森本敏氏は大阪府立豊中高校の第12期卒業生です。防衛大学理工学部を卒業後、航空自衛隊外務省アメリカ局安全保障課に出向。1979年に外務省入省、一貫して安全保障を担当され、退官後は、慶応義塾大学などの講師や客員教授を務められました。また、2012年には、民間人初の防衛大臣に就任されたという、安全保障の専門家として、右に出る者はいないと言っても過言ではありません。

そんな森本氏の話が直接聞ける機会があるというので楽しみにしておりましたところ、諸事情で計画しては流れ、再度計画しては流れて、今回漸く実現いたしました。

森本氏の話は、概ね次のとおりでした。

まずは、追加予算や選挙の合区の話に始まり、ウクライナとNATOについてロシアの思惑問題、イランの核保有問題、イギリスのEU脱会に伴うフランス・ドイツのリーダーシップ問題、フランスのマクロン大統領の人気低迷とドイツにおける緑の党の躍進、習近平の毛沢東に勝る長期政権などに触れたほか、QUAD(クワッド)日米豪にインドを加えた4国の対中国包囲網を固めたこ



と、片やインドはロシアとも印ロ首脳会議を行い、ロシアからの武器輸入や共同開発する「2プラス2」を行い、インドが米ロ両者の要になっている等々の内容でした。然り、インドは中国との境界線問題を抱えており対中国結束という面で一致しています。また、バイデン大統領の主催で開催された「民主主義サミット」には、110国が参加し、専制主義国を牽制するなど、中国、ロシアと民主主義国との対立は厳しさを増しています。

森本氏の話を書くという有意義な時間は瞬く間に過ぎました。昼食の後、集合写真を撮って終了となりました。森本氏にはご多忙の中、有難うございました。



講演に先立って挨拶される 中野 寛成 R&I 顧問



森本 敏 氏を中心に参加者集合写真、
車椅子の方が 筆者 木津谷 文吾 氏

翻って思うに、人間社会の何処かでいつも戦争が行われ、多くの尊い命が失われています。人民の生活は滅茶苦茶になります。

しかし、人間に征服欲、権利欲や宗教的信念がある限り戦争はなくなりません。また、人間に私利私欲がある限り、虐待もなくなりません。

ところで、中国のGDPは、どんどん伸びて米国に迫っています。もし、米国を追い抜くような事態が起こるとしたら、共産主義や社会主義が、民主主義や自由主義よりまさっているというように流布されて、世界の構図に軋みが入るのではないかと懸念されます。

人道に反することをおこなっている国に制裁を加えても、余計に反発するだけで、その国のトップがそう思わないと治りません。

トップに国民を愛し、世界を愛し、滅私する気持ちが芽生えない限りこの不幸な事態を変えることは極めて困難です。

サイレント・マジョリティは、世界がどうなるろうとも、一日一日小さな幸せがあれば、それで満足です。

以上、私見を交えて感想を駄文いたしました。

用語説明

サイレント・マジョリティ (silent majority)

積極的な発言行為をしないが大多数である勢力のこと。アメリカのニクソン大統領が、1969年11月3日の演説で「グレート・サイレント・マジョリティ (the great silent majority)」と、この言葉を用いた。当時、ベトナム戦争に反対する学生などにより反戦運動がうねりを見せて高まっていた。しかし、ニクソンはそういった運動や発言をしない大多数のアメリカ国民はベトナム戦争に決して反対していないという意味でこの言葉を使った。それ以降、「発言はしないが現体制を支持している多数派」というニュアンスで用いられるようになった。(Wikipediaより) マーケティング用語としても、「発言しない大多数の消費者」との意味で用いられている。



3. 鞍が回る

会員 鳥居 雄司

難しく楽しいコース

今回の大会は釧路湿原です。湿原の北西部に隣接する地域にコースが設定されてます。冬に多くの鶴が渡ってくると知られている鶴居村です。ここは湿地が次第に乾燥して草地になっています。地盤が固まってきている半面で地下の少し深いところは軟弱で場所によっては小川というか小さな流れが所々見られます。また、周辺は小高い山で囲まれています。コースは乾燥してきた湿地と周辺の高地を組み込んだ、変化に富み、運動量を多く求められ、高地の高みから湿原方向に向けた景色を楽しめます。

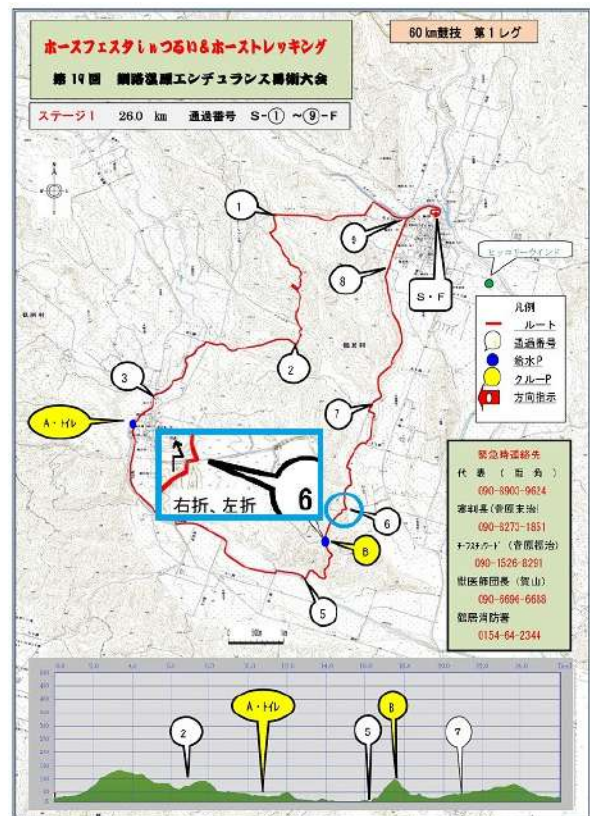
馬に負担をかけないように

大会当日の天気は、曇り、気温 17 度、ほとんど風がない恵まれた条件でした。さらにこの日は湿度が低く、気持ちの良い気候でした。長距離を走るエンデュランス競技は気温 10 度を超えるくらいが騎乗者にとって快適です。17 度なので、水分の補給を考えながら騎乗しようと思います。また、傾斜地の昇り下りや横断があるので騎乗時の姿勢の安定を保つこととアブミに適切な体重をかけるように気をつけようと考えました。馬に負担にかけない走行が重要です。

完走を目指して

今回は距離 60km に参加しました。60km は 30km と 30km の二つの区間に分けることが多いのですが、今回は 25km、21km そして 20km の三つの区間に分けられています。3 区間の合計は 66km になり、コースの高低を考えると実際の距離は 70km に近いと考えられます。実距離が長いので、馬に余分な負担をかけず適度な速さで走ることが完走に大きく影響しそうです。同じ馬主さんから馬をお借りした 60km 参加者が 3 人いました。私以外のお二人は経験も実績もあり、走行を妨げないように気をつけながら同行することになりました。馬の群れは、先頭が動き出す

とつられて他の馬も動き出して群れになります。それで、一頭ずつがコースをバラバラに走るよりも、先頭馬を交代しながら群れになる走り方が互いに負担の軽減になります。



一区間は

5:00 に出発し、3 頭がー列になって先頭を交代しながら走り始めました。一区間は通過番号 1 番から 9 番までです。順調に進み、選手の通過を確認するチェックポイントを通り、山道を下り、舗装路に向かって時、先頭を走っている私の馬は、道の右前方に置いてあったセメントの土管を危険なものと感じたらしく左へ大きく横に飛びました。私はコースの確認に注意を払っていて、バランスを崩して落馬しました。特に痛みなどはなく、馬に乗り直し、6 番に向けて走り出しました。示された地図によると右に曲がりすぐ左に曲がるのが読み取れます。そこで舗装路に出て右折後の左折する場所を探しましたが曲がるような道がなく、そのまま舗装路をしばらく走りました。地図ではすぐ左に曲がっているの、おかしいと考えて舗装路を元に戻りました。すると、



右に曲がるのは舗装路ではなく舗装路を横断してからではないかと考えられ、横断後に右折してしばらく行くと 6 番標識を見つけることができました。先頭で走っていると、地図上のコース、走っている場所の様子、馬の状態にそれぞれ目を配りながら走ります。6 番の通過後は、ほぼ道なりにコースをたどってゴールに到着することができました。到着は 6:57 だったので、1 時間 57 分の走行でした。

競技中に落馬すると

今回、私は落馬後にすぐ馬に乗り、走行を再開しましたが、競技中の選手は仮に大きな事故になったとしても走行を再開することがままあります。大事に至らなければ良いのですが人と馬の安全を考えると、走行を再開する前に冷静に判断して走行の中止も考えなければならない場合があります。その判断は落馬した選手には難しいので、とにかく落馬した時は本部に連絡することが義務付けられるようになりました。そして、本部から落馬した場所へ医師が出向き、人と馬の状態を確認した上で競技を再開するか判断を求められています。今回の私の場合は 3 頭で一緒に走行して、落馬の様子を他の 2 名が確認しているので、馬主さんに様子を伝えて続行しました。

二区間も

二区間の走行に向けた獣医検査を無事通過して、出発時間は 7:50 になりました。二区間は 10 番から 19 番までの標識を通過するコースです。スタート地点から最初の 10 番標識を通過すると進行方向左側が低く右側が高い山の斜面を横切ります。私はここで左右のバランスを崩して再び落馬しました。その時に落馬しないようにこらえたのが悪かったのか、馬の鞍が回ってしまいました。回った鞍を元の位置に戻して、騎乗する必要がありますので、水平に近いところまで馬を引いて移動しました。鞍を正常な位置に戻して競技に戻りました。

そうこうするうちに二区間は 9:47 に到着しました。走行時間が 2 時間 57 分ですから一区間に比べて 1 時間余分にかかりました。馬を引いたり、鞍を直したりで時間がかかりました。三区間に向けた獣医検査後に馬の呼吸が弱いと言われました。この馬は非常に体力があるのでこれま

で呼吸が弱いと言われたことはなく心配になり、三区間はゆとりを持ってさらに負担をかけない騎乗をしようと考えました。



三区間は

指定された 10:34 に三区間を出発しました。三区間は 20km の短い区間ですが、高低差があって難しいと予想していました。高低差があると高いところを走る時に展望が開けた気持ちのよい景色を望むことができます。馬の負担を考えて、無理をしないで景色を楽しみながら 12:24 にゴールすることができました。所要時間は 1 時間 50 分ですから、二区間の時間を考えると妥当な走行でした。13:35 の走行制限時刻に十分余裕をもって完走することができました。

鞍が回る

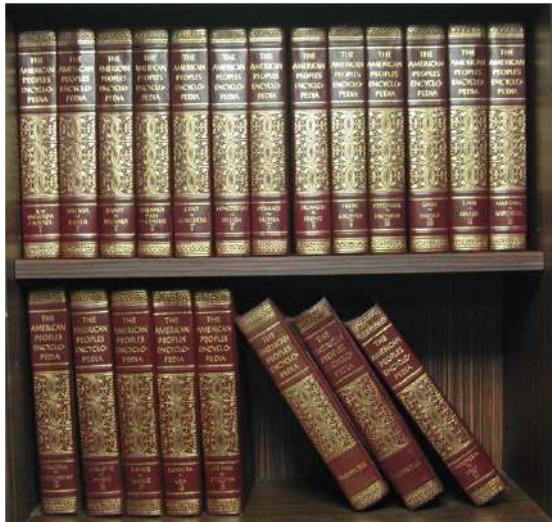
鞍が回るというのは乗馬では珍しいです。というのは、馬に乗ると第一番に腹帯を締めるからです。馬体と鞍を一体化するくらいにしっかり閉めて乗馬を始めます。しかし、馬場馬術や障害馬術に比べてエンデュランス競技は長距離、長時間走るので、馬の運動を邪魔しないように腹帯は緩めに閉めています。かつて急坂を横切る時にバランスを崩して鞍を回して落馬したことがあります。その時も私の騎乗が左右のバランスに欠けていたことが原因の一つでした。

今回の大会後に、私は騎乗時のバランス改善を図る方法の一つとして、鎧(アブミ)から足を外して、左右とも足がぶらぶらする状態で常歩、速歩、駆歩をする練習をしています。乗馬は奥が深いスポーツだと実感してます。



4. 百科事典のセールスマン

会員 赤神 潔



私は百科事典のセールスマンだった。

1964 年当時、渋谷駅の近くの松濤町に、ジャパン・ニュー・ワールド・KK という2階建て仮設建物の販売会社があった。その頃では珍しく『固定給無し、歩合のみ』のセールスマン、セールスウーマン達が日本全国に散らばり、アメリカン・ピープルス・エンサイクロピディアと言う、全20巻の渋い赤茶色に金文字の、かなりしっかりした装丁の英語の百科事典を8万9千円で売っていた。それを1セットC.O.D.(代金1括引替え)で売り、サイン、捺印入りの一枚の契約書を会社に持ち込むと即座に3千円、半月経って配本全額集金が出来ると2万円から10%の税金を引かれて、コミッションとして貰えたのである。当時の大学出の1か月の給料が2万6000円位だったと聞いていたので、そのコミッションはきわめて魅力的に思えた。

社長は日系カナダ人2世のジョージ鈴木さんと韓国系カナダ人ダン林さん2人、イーコール・パートナーで、ジョージさんはカナダのプリティッシュ・コロンビア州の、当時、漁業の盛んなスティヴストンの出身で、両親がフレーザー河口

に位置するアナシス島の北岸で船大工をしていたこと、毎日友達と2人でフレーザー河を手漕ぎボートで渡って対岸の学校に通ったこと、時々アナシス島でブラック・ベアーが出たこと、冬には時々フレーザー河が凍ってしまい学校へ行けなかったこと等、昔話をよくしてくれた。

ダン林さんは1見コリヤンで、話してもコリヤン訛りが出て、日本でセールスをするのは大変なことだと思ったが、ジョージさんが曰く、2人とも以前別の百科事典のセールス会社で、トップ・セールスマンだったそうだ。ダンさんは毎日セールスに出て、家に帰ると元日劇のダンサーの奥さんか、鏡の前で、セールストークの練習を続け、最初の契約が取れるまで、1年もかかったそうだ。

ジャパン・ニュー・ワールド会社に応募したのは、読売、毎日、朝日などの主要新聞の日本語の広告のなかに、当時としては稀に小さく英語で『ノーサラリー(固定給なし)、フル(完全)・コミッション(歩合)・セールス』とあったからである。阪急電車で服部から梅田に出て市バスで空町まで行った。探していた会社のオフィスは間口2間程の紳士服卸屋の横の、狭く暗い階段を上ったところにあった。赤レンガの小さな2階建てビルの2階の1室に、長野県松本生まれで東京育ちの粹でハンサム、長身で、その上、上品で洗練された感じの若い男性課長兼大阪支店長が一人いた。カラフルな百科事典全巻の実物大のポスターが張られた壁を背にして、私が英会話塾をして居た時と寸分たがわない安い折りたたみ椅子に腰掛けていた。別室に女性の事務員が1人、小さな黒板を背に、小さなグレーの事務机とファイリング・キャビネットの横で黒色の電話番をしていた。

私は直感で、話しが旨すぎて、非常に危険だが、その課長の嘘の言えそうな人ではない繊細な人柄と上品さに惹かれ、99パーセント彼の言葉を鵜呑みにし、1%騙されて‘自分で商売を始めるつもり’で、サンプルを買った。その時、自分の名刺が出来までの為にと、辞めて行った誰かがオフィスに置いて行った、ジャパン・ニュー・ワールドKK、リプレゼンタティブ‘SUSUMU SHIMIZU’と言う名刺を貰った。当時、つきあっていた知己の小山君は「赤さん、騙されてサンプルだけ買わされたのと違うか?」と言い、私はそ



れに反発したが、しかし、2週間程全く売れなかった。

学生時代から持っている、1着ぽっきりの、よれよれで安物の青灰色の背広を着て、踵の極端に方減りした穴のあきそうな、これも安物の古い黒靴を履き、あり合わせの黒いビニールのづた袋にプロスペクタス(サンプル)と契約書を入れ、あても無く電車とバスに乗り、人口800万の大阪の町を疲れてふらふらになるまで、うろろ徘徊し続けた。2週間目ともなると、度重なる門前払いに、ヘトヘトに疲れ、特に夕暮れになると、涙こそまだ出てこなかったが、自分でも自覚する程目をしょぼつかせ、当惑と焦りが交互に襲って来た。ふと昔、小、中学校の頃、毎日学校から家に帰ると、兄嫁に、『Hちゃん(同じ年の甥)の勉強の邪魔だから、外で遊んで来なさい』と、家を追い出された時の、得体の知れない不安感と、それを押し殺そうとする反発精神のことを思い出した。その頃、せっせと図書館に通って読んだ本の中で、乃木大将の伝記が好きで、自分はどちらかと言うと涙もろく、乃木無人(泣人)のように『責任を感じて腹を切る。』『死んだつもりで頑張る。(明治天皇に仕える)』という言葉に何故だか理由もなく単純に共鳴していた。

その日も、意識的に何度も大きく深呼吸をして、『まだ腹を切る程ではない』と、自分に言い聞かせながら、何度も天を仰ぎ開き直って帰路に付いた。服部駅で阪急電車を降り、じんじん痛む足の裏を引きずり、当面の居候先、腹違いの長姉が住んでいるアパートへと向かった。その日も晴天で、一日中、体を使って馬車馬のようにがむしゃらに頑張ったが、もうセールスをし出してから2週間も経つのに全然売れない。昼飯は食ってない。また、姉に嫌々何か言い訳を言い、次の日の電車代を無心せねばならぬ。

何時も通る薄暗い路地裏に、ひときわ明るく歯医者さんの窓が半ば開いていた。振り向くと、中はすごく暖かで安全そうで、人の良さそうな、小柄で年配の白衣の後ろ姿が、若い女性患者を前に、私には全くの別世界の『幸福物語』を演じているように思えた。急にそれが私の胃の奥に痛く響いた。丁度、7時過ぎだった。

空腹を我慢して、ぎりぎりのへたり込む程の疲

労と戦い、唯、一步一步とひたすら家路に専念していた私は、その中に、何故だか魔法に掛けられたように中途半端で不確かな不思議な気持ちで、ふらりと、『腰を下ろして、少し休憩出来ればうれしい』位な気持ちで吸い込まれて行った。引きつる思いの作り笑顔で先生と向き合い、椅子に不器用に腰掛け、うつむき気味に床に置いた鞆を左手であけると、老先生は百科事典の見本の背表紙を垣間みるなり、しっかりとした肯定的な声で「本かー」と、真面目に受け止めてくれて、白い首筋と背骨をグイッと伸ばして、椅子からゆっくりと立ち上がり、奥へ入った。

しばらくして、奥から、まだ、近くの大阪歯科大学に通っているような、日焼けした若先生がロー杯に何かを頬張り、白衣を右肩に半ばひっかけながら、バタバタと重い革スリッパを引きずって出て来た。

はじめは冷やかしか半分に見えたが、知ったかぶりで「百科事典かー、俺は百科事典には一寸くわしい。」と親父と女性患者の前で、大声で宣言し、次の瞬間「サンプルは、たった此れだけか？」と早口に聞いて来た。私が真面目な笑みを浮かべて「はい、これがプロスペクタスです」と自信たっぷりに胸をはって、故意にゆっくり気味に、この英単語を先生は知っているかどうか?と思い、間を取って答えると、若先生は案外素直に「おお、プロスーペクタスと言うのか」とゆっくりと言いい、暫くすると、私のセールストークを真面目に受け入れはじめ、素直に本気で食い入るようにプロスペクタスのページを、自分から少し宛繰り始めた。私は若先生の開けたページの翻訳を早口に続けながら、若先生がいちいち頷くのを見逃さなかった。その瞬間、空かさず、全身で『ここだ、この先生は英語が読める!』と手応えを感じた。若先生はうつむいてプロスペクタスのページを繰り、あごひげを弄りながらはっきりとした声で、「金が無い」と、横で再び若い女性患者を診始めた親父に訴えるようにつぶやいた。「シガレット・マネー位で買えます。2千円宛のマンスリー・インスタールメント(月賦)で買えます」と、出来るだけ正確なLの発音を混ぜて言うと、若先生はページをめくりながら、自分のほほをつねり、「シガレットは止められない」と首を振った。シガレットと英語で乗って来たので、「それでは、シガレッ



ト・マネーを半分セイブ(節約)すれば」と、私が言うのと、横で患者さんを見ていた老先生が急に手を打って、「そうだ、そうだ。もう 1 押しだ。プッシュだ。もっとプッシュだ。」と、笑いながら、片言の英語を使って嬉しそうに私を応援し始めた。私はそれが嬉しくて、突然、私の顔から大粒の涙と大粒の水鼻がワッと吹き出した。若先生は英語のコントラクトにサイン、捺印しながら、「本当に月 2 千円宛だぞ、本当に俺はシガレット・マネーを毎月半分セイブして買うのだから」と俯いて涙をこらえている、私の肩を撫ぜながら念を押した。老先生が私に白い蒸しタオルを渡しながら「泣かなくても良いのだ。息子のシガレットが減るので大賛成だ」と、うれしそうだ。最長の月賦で売れた。生まれて初めての販売契約で、コミッションは月賦のためトータルで 3 千円位ボッキリだったと思うが、それでも嬉しかった。私の百科事典のセールスでこれが数少ない最長の月賦の契約の一つで、殆どが COD(代金引き換え、一括払い)だった。

涙が乾くまでと思い、姉のアパートのある 3 階を通り越して、他人の絶対来ない私だけの秘密の場所、4 階建鉄筋公団住宅の最も高い、階段の屋根の上までよじ登った。まだ暖かい、新しい匂いのコンクリートの上で、防衛大学にいる時一人で覚えた儀式、上半身裸になりズボンを脱ぎパンツ一つになると、仰向けで大の字に寝そべって、両手両足を思いっきり突き出して、限りなく大きな星空を眺めて瞑想した。すると又、自然と、親のいない小さな自分が独立して、一人で大宇宙の星間に浮いていて、その私の爪先の方から首の方へ、徐々に蛍のように輝き出すように思えて来た。それと同時に、全身をアドレナリンが駆け回り、目をつぶると昨日まで百科事典が売れなかったのが全くの嘘のように思えて来た。1 度、僅か数分で売れてみると、百科事典を売るのは何でもないように思え出した。デンティストにも、オーソドンティスト(矯正歯科医)にも、フィジシャン(内科医)にも、サージャン(外科医)にも、ガynecロジスト(産婦人科医)にも、ピディアトリシャン(小児科医)にも、耳鼻咽喉科医にも、眼科医にも、ダクター(医者)にもナース(看護婦)にも、これから出来るだけ正確な発音の英語の単語を混ぜて使うことにした。防衛大学校にいたとき、管制塔を見学

に行ったことがあり、出てきた日本人の管制官が我々防大生のグループを前に、綺麗な発音の英語を混ぜて、喋り始めた時に驚いたことを思い出した。私は『これだ!』と気づいたのだ。

明日からのセールスがすごく楽しみになって、全身に奇妙な武者震いを感じ、額やこめかみ、首筋、脇の下を冷たい脂汗が粒になって流れ出した。妄想から目覚め、ようやく起き上がって、姉のアパートに帰った時は 11 時を過ぎていた。

私は、当時 23 歳。大阪支店(通称)所属で、日本国中、全国何処でも販売活動が出来たのである。全国のセールスマン約 100 中、最年少で、年に 1 度か 2 度のセールス・キャンペーンの時など、会社で 2 番目の成績だった。1 位は何時も東京本社所属のユウジン・チョイさんで、当時 34、5 歳既婚の中国系元大学講師とのられ込みだった。私は実際にチョイさんを知らないが、チョイさんは、毎月確実に 20 日以上働き、確実に 25~30 セット売り、『毎年、文化住宅、10 軒 1 棟を買うのが目標だった。』と聞いていた。

私は仕事を始めてから半年程経った頃、1 日働くと大体 1 セットから 3 セット売る確かな自信が出来ていたが、集中して働けるのは月のうち 2 週間位、せいぜい 15~20 セット位で、彼のように月に 20 日から 25 日間、毎月 25~30 セット安定して売り続けることがどうしても出来なかった。この自分の不甲斐なさへの反省と、自己管理への焦りが、次第に積もり積もって、後程北アメリカへ 1 人で出発した大きな理由の 1 つになったと思う。内心『異国に行けば、頼れるのは自分だけで“背水の陣”になり、何事にもより一層、毎日、頑張り続けられるだろう。———成功出来るだろう』と思ったのである。羽田空港を日本航空のジェットで飛び立つ時は、漠然ではあったが、『俺は、絶対成功する』と念仏のように唱え、自分の体全体に暗示をかけた。

私は今から 57 年位前、暑い真夏でも、別注の英国製生地 of 紺のスーツと、阪急百貨店別注のワイシャツを着て、イタリア製のネクタイと、最も安いオメガの腕時計をし、別注のネイヴィー・ブルーの革靴の底まで注意深く磨き、薄茶色のダラス鞆を下げて居た。飛行機と赤いトヨタ・パブリカ・オープン・カーのレンタルと白い新車マツダ・



ファミリアを駆使して、日本国中の医者と歯科医を訪ねては、ニューヨークのタイムズ・スクウェアの近くにある、グロリア社出版の極平易な一般的な米国のファミリー・エンサイクロピディアを普及していた。

富美子と知り合ったのはその半年後のことだった。空心町のジャパン・ニュー・ワールドKK大阪支店を出て、国道2号線を西へ、阪急梅田駅の方へ1分程歩き始めると、南側に新築の白い4階建ての松屋紳士物洋服店があった。1階の大きなショウ・ウィンドウの入り口で富美子は1人静かにレジを受け持っていた。我々セールスマン仲間で評判のかわいい看板娘だった。その入り口の西側の外に併設された階段をのぼると、中2階に、中年で小柄の、綺麗なママの経営する‘ティファニー’という小さな喫茶店が新しく開店した。地方へ出張に出ていないセールスマン達は申し合わせたように会社に行かず、自然とそこに集まり、毎朝そこでモーニング・セットの1杯のコーヒー、トースト1切れ、ゆで卵1個を取り、その日のセールス活動がそこからスタートした。

ある時、高級背広の知識の豊富な東京育ちの課長と、少しにやけて、これもおしゃれで金縁めがねとローレックスの金時計、金の指輪の好きな米国イリノイ大学帰りのロイ・森岡さんや韓国人のハンサムなジョン・長谷川さん達先輩とで、その洋服屋へ1度冷やかしに行くことになった。皆で松屋の社長を質問攻めして、色々冷やかして物色しているうちに、結局、体が大きくて首つりの背広では間に合わない、独り者で真面目で吞まずに余り遊び回らないためにお金が自由になる地味な私が、1着注文することになった。寸法をとり終わり、置いてきぼりになったことに気づき、慌てて先輩を追い、店の中の螺旋階段を階下において、レジで手付け金を払おうとした。すると、今まで通りすがりのガラス越しにお互いに顔を見て微笑む程度で、話をしたこともない富美子が、突然「今度の日曜日、とどこかへ連れて行ってー」と、レジの向こうから背伸びぎみにねだるように言った。私より先に店を出た、世間擦れした私の先輩達に散々からかわて、勇気付いた富美子に、私はびっくりして、しかし余りにも嬉しくて、レジの前で固まって全く動けなくなってしまった。暫くして、「何処へいきたいの」と聞くと、即座に

「京都の苔寺がいい」と言った。富美子は大島紬とか言う白と鮮やかな藍地に、小さな赤い花を隠すように疎らに配した和服が良く似合い、古都の静寂感を引き立てていた。密かにほんのりと嗅ぐ合う苔庭園のすり減った飛び石の残像が今でも私の脳裏に焼き付いている。苔寺はその時が初めてだった。

その次のデートで私はこんなことを富美子に言った。「我々がこんな風に付き合うのは、二人で幸せになるためだ。将来、結婚して子供を作って、どの方向に進んで行くかは、まだ全く分からない。しかし、私は我々の幸せと発展を目指して、全力投球して生きて行くので、例えどちらの方向に行こうとも、迷わず信じて付いて来てほしい。」富美子は「はい」と同意した。

課長が運転する白色の新車コ罗纳(車)に2人の先輩セールスマン達、ロイさん、ジョンさんと、同期でちょっと年配のセールスマン、岡本さんと相乗りして、四国の徳島市、室戸市、安芸市、南国市、高知市から、土佐中村市、土佐清水市、宿毛市、宇和島市、八幡浜市、大洲市をへて、松山方面を回っていた時のことである。

特に、土佐の先生方は良い方ばかりで、昼頃、土佐に着いて、早速午後から仕事を始めた次の日の朝には、私がアポイントメントを取るために半分英語の単語を混ぜて電話をすると、もう、その前夜の内に医者仲間で私のことが評判になってしまっていて、「話は昨夜、友達から伺っています。どうぞいらっしゃい」と言ってくれる先生が続出した。

同僚のセールスマンで一緒に来ていた岡本さん(当時50歳前後)は、土地のビジネスマンや教育者達をあたっており、毎晩クラブに通って、クラブで働いているある女性に熱を上げた。彼は大阪の堺市に綺麗でおとなしい奥さんが静かに待っているのに、一人で高知に居残り、百科辞典のセールスの仕事を高知近郊で続けて、とうとうその女性宅に住みついて帰れなくなってしまった。

土曜日に、大阪で私の帰りを待っている富美子に会いたくて、その上、朝の内に私は数件契約が取れていたため、課長に頼んで、昼過ぎから新居浜市の小さな水上飛行場に駆け付けて貰った。1



日 1 便の伊丹行きの 11 人乗りの水上艇がすでに満席で万事休すであったのだが、一旦断られてから、必死に頼み込んでパイロットの了解を得て、「他の乗客には、黙っていて下さいよ」と、折り畳み式の補助席に乗せて貰ったことがあった。異例のことだったそうだ。

我々は数カ月後、当時、岡本さんの奥さんが住み込みで手伝いをしていた、堺市のカトリック教会で結婚式を挙げたこともあって、新婚旅行は全日空のフレンドシップ機で、伊丹から土佐の高知へ飛び、岡本さんに奥さんのもとへ帰るように説得を続けた。

数日後、高知からは全くの行き当たりばったりで、土佐中村市まで、汽車に乗り、毎年、巨大台風に見舞われる足摺岬の景観と、その過酷な環境に耐え抜いた日本最古の灯台を 1 度見に行くべく、駅前からローカル線のバスに乗った。シーズン・オフのためか客は我々だけで、国鉄の土佐中村駅から終点の足摺岬まで、バス 1 台、我々だけの貸切りだった。バスの運転ちゃんがとても親切で、朗らかで、バスガイドを買って出てくれて、我々は運転席のすぐ横に座り込んだ。

亜熱帯の快晴の下、赤い花の咲き乱れる椿の灌木と背の低い緑の棕櫚と暖竹が 1 面に生い茂った森に囲まれて、青い太平洋が妙にギラギラと輝いていた。深窓から巣立った富美子は、家族と親戚の幾重ものプレッシャーから遂に解放されて、胃痛もしばし忘れ、明るく生き生きし始めた。私は日本でもカナダでもステーツでも灯台があると、特別時間を割いて、海のおいを嗅ぎ、光の乱舞を浴びるために、わざわざ行ってみる事になっている。足摺岬の明るい平和な亜熱帯性の太平洋の水平線が特に好きで、その時、すでに、その想像もできない規模の大海原の遥か向こうに、自分達の将来があるような『不思議な予感』がしていた。同時に私は水面を見ると、その水の全体積を想像して、驚嘆し、恐怖を覚えた。

高知への新婚旅行から飛行機で大阪に帰って直ぐ、その翌日の仕事初めの出張の朝、富美子と 2 人で大阪の杉本町の家を早朝の 2 時頃に発った。岡山県の日生町だったと思うが、国道 2 号線をマツダ・ファミリアで西へ 6、7 時間夢中に走って小さな町にさし掛かり、道路脇のその町の小

さな郵便局の前に車を止めた。我々はその日から、岡山県矢掛町にある富美子の実親父の里に泊まり、可能ならば、岡山県全域で 1 ヶ月程、販売活動をするつもりだった。その郵便局の中の公衆電話から、医師会名簿にあるその町の町立診療所の先生に電話をかけた。先生は忙しそうに、「君はどこから電話をしているのか」と、確かめてから、「今から、山奥の急患を往診に行くところだ。その後で、そちらに向かうから、そこで待っていてくれないか」と言った。私は勿論言葉に従った。富美子が「先生ここに来るの。私どうしよう」と、心配そうに聞いた。「心配しないで、車の中で待っていれば良い」と、私は富美子をなだめた。

1 時間程して、先生らしき白衣の人が小さな白色のスクーターで、波打つ緑黄色の広大な稲原のどこからともなく、突然猛スピードで現れ、右手を高く挙げて大きく振りながら、私の方へ走って来た。それを見た瞬間、私はもう『百科事典は売れた』と思った。先生のスクーターの小さ過ぎる荷台と私の両手の上に、プロスペクタスとストレッチャーと PSSs(Proof Of Subscriber's Signatures、私は自分の売った購入者の自筆のサインと捺印入りの契約書のコレクションを持っていた)を広げて、夢中になって説明していると、先生の後ろで、富美子が車から出て来るのが見えた。多分、先生に挨拶をして、私の手元を助けなければと思っているのだろうと思いながら、喋り続けて、サインを取るのに 5 分とかからなかった。富美子はこの時初めて私の強烈なセールスを目撃して、売れたのか売れなかったのか、全く分からない様子だった。別れる前に先生は「弟がやはり隣村で開業している。必ず行きなさい。買ってくれるから」と言った。弟先生には 2 人の年頃の女の子がいて、2 人に両手を引っ張られるように、診療所を通り抜け、案内された古風な居宅の応接間から、先生を待ちながら一人、廊下越しに庭を見ると、奇麗な薄緑のマスカットの大きな房が幾つか手の届くところに鮮やかに実っていた。

北海道の留辺蘂辺りで、百科事典を買って貰った後のこと。混んでいて、足の踏み場もない程の患者に囲まれながら、突然、お客さんであった先生(医者)に「お前が気に入った。一緒に何かビジネスをしよう。俺が 金を出す」と皆の前で言われてとても慌てた。セールスに訪ねたお客さんから、



そのような誘いが突然あることなど、考えてもいなかったのだ。しかも、私はそこに5分程しかいなかったのだ。先生の周りには、大勢の患者(日に300人以上)が診療所の外まで静かに溢れていて、どうみても、土地の知識人で有力者のようである。少しは気持ちが動かないことがなかったが、予想していなかったものだから断るのに四苦八苦しただ。今でも、私の断りが解せない先生の不満そうな顔と、「何故だ、何故駄目なのだ」と聞き返す声が耳に残り、働き過ぎて、疲れ切った先生の顔を思い出す度に、言いようのないノスタルジックな感情の高ぶりを覚える。

ある時、北海道の帯広近くで、予め、前日に電話かけて取って置いたアポイントメントに合せてある病院を訪れ、応接間に丁重に通された。そこには院長他、事務長、そして、医薬品会社、銀行、地元の自動車販売会社、医療器械販売会社、地元の生命保険会社、等等から20人程のセールスマン達が集まっていた。1つの会社につき2、3人のセールスマン達で、部屋の真ん中にある大きなガラスのテーブルを囲んで、座りきれない人はそれぞれ同僚の椅子の後ろに整然と勢揃いして、私を待っていた。当時、既に有名な英語の百科事典、ブリタニカ、アメリカーナ、カリアズ、ファンク・アンド・ワグナー、ブック・オブ・ナリッジ、等のセールス会社の札幌支店の不慣れた者達が未熟な販売技術や、強引な売り込みで、『お客さんに説明不足のまま、契約書にサインだけさせて』、マーケットを荒らし始めていたことをホテルで朝刊新聞を読んで知っていた。

案内役の女性事務員がドアを開けて、丁寧に会釈して、応接室に通された時、予期していない、全員黒い背広姿の20人程が無口で私を見据えているのを見た。一瞬、初めての経験だったので、『吊るし上げに会うのではないかと』と、反射的に思った。しかし、本能的に勇気を振り絞り、先生が楽しそうに紹介してくれる各々のセールスマンとそのセールスマンの販売品を、次々と、機転を利かせて冗談混じりに、最高の笑顔を作って褒め上げた。彼らが、その冗談に乗って来てくれることを一心に祈って、見え透いた大げさなお世辞を乱発し続けて、その都度、個別に、強引な握手を求めて回った。お世辞を言われたセールスマンたちは、少し抵抗があったようだが、握手を求め

られると直ぐその見え透いた褒め言葉に苦笑しながらも、次々と声を出して、姿勢を崩して喜びはじめた。最後のグループには不用意に乱発したため、褒め言葉が底をつき、一瞬、詰まってしまった。何を言ったのか今思い出せないが、苦し紛れに全知全能を振りしぼって、かろうじて何とか遠回しではあったが、その場にポジティブなことを言い、窮地から脱出した。その瞬間、私の知恵の絞り出し方を、首を長くして、目を白黒させて固唾をのんで待っていた満場のセールスマンの(セールスマン・シップの同情の)喝采を受けた。その瞬間一気に、その場にいたセールスマンたち全てを完全に私の味方にしてしまったのである。

先生に百科事典の説明を始める頃には、全てのセールスマン達が嬉々として「そうだ。そうだ。院長先生、これは病院の図書室によいようです」「町の図書館への寄贈品に最適です」と私を応援してくれて、5分位で先生の個人の分と、町の図書館に寄付をする分と、2セットの契約書のサインを取った。

その日、その院長先生の紹介が利いて、夜遅くまで掛かって奮闘して、近くの町で5セット売った。しかし、何故、あのような北方過疎の小さな町で、わざわざあれ程多くのセールスマンたちが集まって、私を待っていたのだろうか。

北海道北見市のどこかで、先生(医者)の前に座り、少し挨拶をしてから、今まで実際に買って貰った先生がたの自筆署名捺印入りの契約書を見せ、百科事典20巻を示すストレッチャーを見せ、説明をはじめた。プロスペクトスを丁寧に説明し終わり、契約書の説明を始めると、先生はペンを右手に持ったまま、「今から一緒に昼飯を食いに行く。あひるの美味しい店が近くにある」と言い出した。私がいくら断っても、先方は百科事典を買うサインをする前に、もう自分でとくにそう決めてしまっていたのだ。契約するより、私と一緒にアヒルを食べに行きたかったようである。私が車の中で待っている富美子のことを考えて、返事が遅れると、「アヒルだ。ダックだ。ダック料理だ。食べるだろう。有名なレストランだ。」と、催促する。私が困って、富美子のことを、「秘書が車で待っていますから」と、断ろうとすると「その秘書も一緒に連れて行こう」と言った。



富美子はその時妊娠 8 か月の身重であった。

富美子はいつもセールス旅行について来た。ある時、「子供が産まれたらどうする」と聞くと、「一緒に子連れで出張について来ます」と言った。では、「子供が幼稚園に行く様になったらどうする」と聞くと、「誰かに子供を預けて来ます」と直ちに答えた。

実際に長男が生まれてからはいつも子連れで旅に出た。富美子には 2 組の親がいた。再婚した実父夫婦と養女先の夫婦。親切な伯母も待ち構えていた。

数年後、会社で親しくしていた集金係が、「赤神さんの契約は全て完璧だ。どの契約先も、赤神さんが今どうしているか気に掛けてくれていて(特に私の身長が高かったので良く覚えていたらしい)、1 つもキャンセルがなかった」そうだ。彼によると、「お客さんが色々とセールスマンの事を覚えていて、また、もう 1 度そのセールスマンに会いたがるケースは特異だった」そうだ。彼は日本全国出張して、私が売った先々を追っかけて集金して回るのが楽しくてたまらない様子で、次は私がどこへ行くのか、自分は次にどこへ行きたいか、会う度に私によくリクエストしていた。

私は先日 80 歳になった。今、気が付いても遅すぎると思うが、若い人のために、記しておきたい。

階段を登る時、乱暴すると、膝や足首を傷めることがある。変な方向から、変な方向へ力を入れて、しまったと思うことがある。昔の私なら、2 ～3 日階段登りは控えて、養生していたが、今は、残る寿命が短くなったので、色々工夫して踏ん張り方を変えながら、どんどん登り続けることにしている。それで気が付いたのだが、不思議なことに、その内、さっきの痛さは、どこかえ吹っ飛んで毎日穴を開けずに、1 年半も 240 ～200 階登り続けることができている。不思議なことに、人の体は、痛く感じると同時に、脳から身体中に信号が出て、その痛さの原因を即座に修正出来るように出来ているようである。

登り続けて、苦しくなっても、体の中はその苦しさを修正するように脳から指令が出て、働いて、なんとか続けると急になんでもなくなるようである。丁度マラソンで、苦しさを経験しても、続けて頑張ると、体の中が修正されて、ある程度は無理が効くのと同じことだと思う。途中でやめると、いつも失敗である。

セールスでも同じことで、我々の体は不思議と良く出来ていて、無意識のうちに、失敗を栄養に我々の脳から、全身にあらゆる角度から命令して、売れるような人間に変身(修正)出来るようである。この変身(修正)能力に早く気がつかねばならない。



発行：特定非営利活動法人 リタイアメント情報センター (R&I)

〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 18 階 ヴィップシステム(株) 内

●TEL 03-5860-9483 FAX 03-5860-9477

●事務局 TEL 080-9982-6237

●事務局 E-mail : haruo_shimamura@hotmail.com HP : <http://retire-info.org/>

(発行責任者) 事務局 島村 晴雄